

## わたしの「ふるさと」論

佐藤 武臣

(夏井出身/神奈川支部)

私が高校を卒業して上京したのは、今から50年前の昭和38年春である。配属された職場には会津出身の先輩がいていろいろ面倒を見てもらった。話を聞けば、会津出身とはいっても、それは100年以上も前の話で、曾祖父の代に会津戦争に敗れて東京に移り住んだと言う。同じような経験がもう1回あった。平成8年、単身赴任で青森県六ヶ所村の再処理施設で働いていたとき、付き合っていた工務店の主人が会津出身で、これも会津戦争に敗れて「斗南藩」に移された会津藩士の子孫だと話していた。聞けば、元青森県知事の木村守男氏も同じ会津藩士の子孫ということであった。その両者に共通して言えることは、3代を過ぎて

もいまだに会津に本籍を置き、先祖を崇敬し、先祖が味わったことを肝に命じ、年に一度の墓参りは一度も欠かしたことが無いと言う「会津士魂」である。

私も「小野町会」の一員として活動している中で思うことは「ふるさと」を感じる要素がどんなところにあるかという論点である。文字通り「故郷」と書くか「生まれ育った場所」を指すの

も一つの要素ではあるが、それだけではないように思える。それは会員同士の話を聞いていると、どこかで親戚や縁戚の関係にあるということがある。それもそんなに古い話ではなく、会員同士なら3代さかのぼればどこかでそれにたどり着く。家のばあさんは兄妹だったとか、いとこの嫁は本家の娘だとか、兄嫁の妹がうちの家内だとか…。

こんな関係もふるさとを感じる大きな要素であることに間違いはない。そして会津士魂に見られるような共通の思い出である。同級会で話の出るような楽しい思い出や苦労話。戦争での悲惨な心の傷。そんな共通の思い出も「ふるさと」には欠かせない要素であろう。要約すれば、〈生まれ育った場所〉を指すのは『地』のつながりであり、親戚や姻戚の関係は『血』のつながり、共有する思い出は『知』のつながりと言えよう。『地・血・知』のつながりが深ければ深いほど団結力は増す。小野町会はそのような人の集まりである。

前

こ



### 東堂山・昭和羅漢を美しく

日赤奉仕団すみれ会23人の協力による東堂山の清掃活動が昨年11月19日に行われました。

この活動は、ボランティア活動の一環として、毎年行われているものです。

清掃活動に参加された皆さんに、紙上より厚くお礼申し上げます。



日赤奉仕団すみれ会の皆さん

### 小野町ゲートボール協会が福祉のために寄付

小野町ゲートボール協会が、町の福祉事業に役立ててほしいと小野町社会福祉協議会に4万1,000円を寄付しました。寄付金は、過日「チャリティーゲートボール大会」を開催した際、参加者から募金、協賛金を募ったものの一部です。寄付は町長室で行われ、山田季平会長から町長に寄付金が手渡されました。

小野町ゲートボール協会



左2番目から右に)寄付金を手渡す山田会長、吉田重良副会長、村上幸一副会長

および募金された方々に紙上より厚くお礼申し上げます。